社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究』第29号　2017（pp.71-80）

理想の制度を追究する力を育てる高等学校公民科における選挙制度学習
－熟議の視点に依拠した単元開発と実践を通して－

Learning Model for Senior High Schools on the Voting System, to Develop the power to pursue an Ideal System: Developing and Practicing a Civics Unit from the Perspective of Deliberation

斉藤　仁一朗・高橋　雄・新川　壯光
（東海大学・宮城県古川高等学校・東北大学大学院）

キーワード：選挙制度，熟議，主権者教育，公民科，単元開発
Key Words：Voting System, Deliberation, Citizenship Education, Civics, Development of Unit

Ⅰ．はじめに

1．選挙制度学習における共通基盤形成の必要性

18歳選挙権に関する公職選挙法が改正され，学校教育における主権者教育の必要性が一層指摘されるようになった．その中で，模擬選挙をはじめとして，様々な選挙学習が提案・実践されるようになっている（杉浦，2008：「未来を拓く模擬選挙」編集委員会，2013：林，2016）．

ただ，模擬選挙を通じて選挙のプロセスを体験し，政策を吟味する学習が増える一方で，選挙制度そのものを吟味する授業開発研究は多くない．また，後述するように，先行研究では，二つの選挙制度の長短所（メリット・デメリット）や背景となる思想（民主主義観）を比較し，いずれか片方の制度を吟味の上に選ぶように促す傾向にある．結果として，これらの先行研究では，異なる選択肢（意見，制度）を学習者がいかに根拠づけて選び取るかが焦点となる．

しかし，現在の価値多元化社会においては，異なる価値観を反映した選択肢の中から自分が好むものを「選択」するだけでなく，根差す価値観が異なる選択肢を比べながら，異なる中にも共有可能な価値を見出していく必要がある．つまり，本来は相容れない考え方の間に，共有可能な共通基盤となる考え方を見出し，共有不可能な価値をすり合わせていく必要がある．例えば，山田は，多数決に基づく民主主義観と対比した形で，「単なる多数決で物事を決めるのでなく，相互の誠実な対話を通じて，異なる立場の人々との間に合理的な一致点を探っていこうとするタイプの民主主義」である熟議民主主義を紹介した（山田，2010，p.28.）．

加藤が述べるように，選挙制度とは，民主主義の理念を具現する制度である（加藤，2003）．また，坂井が述べるように，投票でどの方式を用いるかは，「民主制の出来具合を左右する重大要素」であり，私たちに出来るのは民意を明らかにすることではなく，意見の集約ルールを決めることだけなのである（坂井，2015，p.iv．p.50.）

そうだとすれば，選挙制度に関して共通基盤となる価値を見極め，選挙制度のあるべき理想の姿をより積極的に論じる必要があるのではないだろうか．この点に関して，従来の選挙制度学習では，異なる選挙制度のもつ価値を両立したり，共通基盤の形成を目指したりするものとはなっていない．

これらを踏まえ，本稿では，複数の選挙制度の吟味と考察を通して，社会的な合意形成のために必要となる「共通基盤」の形成および，理想となる選挙制度の選択・提案を目指した選挙制度学習を開発する．

2．選挙制度学習に関する先行研究の特徴

選挙制度学習は，これまでにいくつかの提案がなされてきた．その中でも，選挙制度学習を前進させるきっかけとなったのは，池野らの研究である（池野他，2004a）．池野は，それ以前の選挙制度学習が，制度の折衷案を容認しがちであり，制度の背後にある民主主義観の分析が疎かになっていることを論じた．その上で，小選挙区制と比例代表制の成立過程や思想的な差異を分析する制度学習論を提案した．このような選挙学習は，選挙制度の学習を単に投票手続きの学習としてではなく，民主主義そのものの学習として行う点に特徴がある．

しかし，この提案では，選挙制度と民主主義観の対応関係を把握し，生徒に説明させることを重視することになる．その結果，自分にとっての「理想の」選挙制度について吟味させるものとはなっていない．

一方で，自分がより良いと思う選挙制度を選ばせる授業も開発されている．そのような事例としては，例えば，二者択一的な形での枠組みのもとで，「賛成か，反対か」などの論点について議論を行う場合が多い．例えば横尾は，「完全比例代表制の導入」の是非をめぐり，論争をディベートで行い，主張の立場を交代させながら，学習者の視点の相対化を図らせ，考察を進めている（横尾，2014）．しかし，この提案は，ディベートという形式に典型的に表されるように，二者択一的な選択肢を生徒が選ぶことを想定している．また，二者択一を迫る際に，メリット・デメリットを比較して意見を決定するように促している．

その他にも，桑原は，高等学校公民科を想定し，「若者の投票率を上げるには―投票は権利か，義務か？」や「公平な制度とはどのようなものか―一票の格差を考える―」などを主題として，他国の選挙制度などとも比較しながら，より良い選挙制度について自分なりの意見を持たせようとしている（桑原，2016）．ただ，この提案は，複数の選択肢から自分の「良い」と思うものを選ぶ際に，自分と異なる考え方（制度，主張）とどのように合意を目指すかという視点が存在しない．

仮に，どれか一つの案を選ぶとしても，他の案の支持者や考え方にどう寄り添い，どうすれば皆がある程度の合意を目指せるのか.先行研究ではそういった考察がなされていない．言い換えれば，選択肢から「自分にとっての最善を選ぶ」議論では，お互いの意見の良い点を組み込んで相互修正を図ったり，第三の案を作ろうとしたりする工夫が見られず，限界を抱えている．

では，どのようにすれば，自分が良いと思う選挙制度を「選択」しつつ，他の選挙制度の正当性にも配慮した考察が可能なのだろうか．

本稿では，異なる選挙制度の持つ特徴を把握した上で，他者の主張を踏まえながら，「理想となる選挙制度」の提案をする学習を設計・実践することを目指す．その際に，選挙制度の違いを浮き彫りにしつつ，「社会全体」や「全員」にとっての「理想」を追究することを目指すものである[1]．

3．社会的な共通基盤形成を目指した先行研究

先行研究では，異なる価値観に基づく制度・政策の吟味や新しい制度の創出を試みる場合，「社会的合意形成」（水山，2003；吉村，2003）や，熟議民主主義に基づく論争問題学習（長田，2014）などが存在してきた．

社会的合意形成論の議論をする際に，真っ先に批判されるのが，「目的としての合意」といった，本来異なる価値観の人々を無理に合意させようとしているというイメージが先行しがちな点にある（水山，2003）．ただ，実際のところ，これらの授業では，グループでの合意を形成させる学習活動をとっている訳では必ずしもなく，異なる価値観に基づく主張の論争点や合意点を検証し，両者の意見の調整案を模索する個人活動に留まる．また，これらの合意点を目指す学習でも，結果としての合意を求めているのではなく，「何が合意できて何が合意できないのか」を見極めたり，「議論を進展させる」ために設定されているにすぎない．

そのような立場をより明確化したのが，熟議民主主義に基づく社会科授業である．長田（長田，2014）は，異なる価値観を有するアプローチ・主張の立場が共通善・共通理解の形成を促す過程として，学習を構築しようとしている．長田は，「個人の意思決定を所与とせず，まず複数の方向性について共同で吟味させる．そして，それを通じてお互いの選好や認識等の変容を促し，共有可能な点について明確化させることで，該当集団における判断の共通基盤となる相互認識を形成する.」と述べている（長田，2014，p.91）．

このような学習者の価値観変容への促しは，先の吉村や水山の社会的合意形成論においても，見られた点である．ただ，長田の場合，異なる価値観の対立点の吟味を行い，共通基盤を少しずつでも模索しようとする点を，特に強調して論じている．また，社会的合意形成論のように，学習者の意見が論理的・論証的に変わるのではなく，対話を通して徐々に変化していくことを促すものとなっている．

4．合意形成論・熟議論から得られる示唆

以上のように，異なる価値観を持つ主張や，異なる価値観を反映した制度を比較分析し，理想の制度を模索するためには，単に各制度のメリット・デメリットを見比べ，最善の選択肢を選ぶだけでは，解決できない．なぜならば，メリット・デメリットを比較するだけでは，その学習者にとって「メリットとデメリットのどちらが大きいか」を吟味させることになるにすぎず，自分が選ぶ意見と反対の意見を支持する人や制度の考え方に歩み寄ることができないからである．

理想の選挙制度を追究する際に必要となるのは，異なる選挙制度がどのような価値観や利害を内包しているかを踏まえた上で，それぞれがどのよう

な共通の価値を有しており，どこで合意できないのか，本当に両者の違いを克服するような代案はないのか，を吟味することであろう[2].

そこで，本稿では，熟議の視点を踏まえつつ，複数の選挙制度に関する吟味と省察を通して，生徒が社会的な合意形成を目指した共通基盤を構築することや，理想を追究することの重要性を意識できる選挙制度学習を開発することとした.（斉藤）

Ⅱ．授業モデルと単元開発

1．生徒の認識変容を自覚するための授業モデル

これより本稿では，理想の制度を追究するための選挙制度学習の授業モデルと単元の開発を行う.

単元開発をする前に，単元開発の視点を3点挙げ，授業モデルを提示する．単元開発の視点は，「選挙制度の持つ価値観の吟味」「対立する諸意見の共通基盤と不合意点の吟味」「継続的な生徒の価値観の省察機会の設定」の3点である.

2．単元開発の3つの視点

1）選挙制度の持つ価値観の分析

本単元において，各選挙制度が特定の異なる価値観に基づいた制度であることを可視化する必要がある．その際に，表面的な分析・議論に終始しないような工夫が求められる．実際，高等学校公民科の教科書や資料集等でも，小選挙区，比例代表制，大選挙区制のメリット・デメリットの記載はなされている．本稿では，制度の基盤的価値の違いを分析する視点として，以下の4つの問いを設定する[3].

- その制度が採用されることで最も利益を得るのはどのような人々か？
- その制度を支持する人にとって最も重視するものは何か？
- その制度を採用することで犠牲になることは何か？
- 他の制度を支持する人からの批判として考えられることは何か？

後述するように，学習者はこれら4つの問いを元に作ったフレームワークを調べ学習によって埋める作業を行うことになる．これらの問いによって，単に制度の長短所を並べるだけに留まらず，背景となる人々の価値対立を意識するように促す．それによって，教科書等の記述では意識しにくい価値観対立の分析を行う.

2）対立する諸意見の共通基盤と不合意点の吟味

一方で，複数の制度を吟味する際に，当事者性を重視した議論を行うデメリットが存在する．それは，「誰の声を優先すべきか」といったような利害対立の問題として想定がなされてしまい，共通善を志向する議論が進みにくい点にある．その結果，特定の制度に対する学習者自身の選好を聞くに留まる可能性がある．本稿では，そのような可能性を避けるために，以下の2点の問いを設定する[4].

- 理想の選挙制度を考えるうえで，それぞれの制度を支持する全員が合意できる点は何か.
- 理想の選挙制度を考えるうえで，それぞれの制度を支持する全員で絶対に合意できない点は何か.

これらの質問は，特定の利害関係者の視点としてではなく，社会全体にとって良い政策，共通善を志向する政策を考える問いとして設定した．これらの問いを提示する際には，授業者が「特定の人のみの視点ではなく，社会全体の共通基盤となりうる価値は何か」と強調するようにした.

3）継続的な生徒の価値観の省察機会の設定

これらのプロセスを単元内に取り込みつつ，本授業モデルでは，生徒の制度に対する価値観を繰り返し吟味させる機会を設ける．そのため，本授業モデルでは「あなたにとっての理想の選挙制度とは何か？」という問いを単元の中で繰り返し行い，生徒の省察機会を設ける[5].

なお，これらの生徒がどの制度を社会にとって理想的だと思うかに関しては，グループで議論をする場面は設けない．本稿では，限られた選択肢を選びとることを重視するのではなく，あくまでも制度の比較分析や共通善を集団では議論し，制度選択や制度に対する選考を見極めるのは，個人の振り返りをすることに留める.

3．実際のモデルの開発

これらを踏まえて，提案するモデルは次頁の【表1】の通りである．本単元を貫く問いは「理想の選挙制度とは何か」とした．第一時・二時では，概説的理解，シミュレーションを用いた共感的理解を促し，第三・四時には，制度の背景的価値観の吟味を進める．そして第五時には全体を踏まえた総括及び発表を行う.

第一時・二時では，選挙制度に対する価値観の吟味をする上で，最低限必要となるような制度に関する知識獲得や認識形成を行う．その際には，いわゆる概論的な学習と，シミュレーションを通した各制度のメリット・デメリットに関する学習を行っている．それらを踏まえて，「理想の選挙制度とは何か？」についての暫定的な回答を求める.

第三時では，各制度がどのような特徴を持っているのかについて，各制度の価値観の特徴を吟味する学習を行う．

【表１】提案する選挙制度学習の授業モデル

	授業の位置づけ	学習する内容	単元を貫く問い
1	制度の概要に関する学習	日本の選挙制度の概要と基本的なルール	理想の選挙制度とは何か？
	理想の選挙制度とは何か？		
2	シミュレーションによる制度理解	同じ結果が決め方によって異なること	
	理想の選挙制度とは何か？		
3	制度の有する価値の調べ学習	制度の背景となる価値観・利害関係	
4	制度の有する価値の吟味	異なる制度の支持者が合意できる点，不合意な点	
5	個人による「理想の選挙制度」の発表		
	理想の選挙制度とは何か？		

（筆者作成）

その際に，先の「２の１)」で示した四つの問いを生徒に探究させながら，各制度が内包する価値観の違いを意識させる．同時に，異なる制度によって利益を得る社会集団が異なることを可視化する．

第四時では，異なる制度が持つ共通基盤となる価値（合意できる点）と合意不可能な点についての考察を行う．第三時で各制度の「価値観の違い」に注目していたことを念頭に置きつつ，この時間は前時とは逆で，異なる制度でも合意できる点，共有できる価値に注目していく．

その上で第五時では，第一～四時の一連の学習を踏まえて，生徒にとっての理想の選挙制度の在り方を提案させる．

４．開発単元「我が国における理想の選挙制度について」

先の授業モデルを踏まえて，具体的な単元開発を行う．本開発単元の目標は次の通りである．

【単元の目標】
(1) わが国の選挙制度について，制度を成り立たせている背景的な価値観を分析することを通し，今日のわが国における理想の選挙のあり方を考察する．
(2) 多様な価値観で構成される現代社会において，他者との議論を踏まえながら，社会的な共通基盤となる価値を意識した上で自らの意見を形成し，価値多元化社会の市民として必要とされる合意形成のための諸能力を身に付けさせる．

このように，本提案では，共通基盤の形成と異なる価値観の人々との対話という，熟議の視点を重視した学習方法となっている．なお，本単元では，先に開発した授業モデルと対応する形で設計した．単元計画は次頁の【表３】で示したように，５時間である．先の授業モデルと同様に，最初の２時間では，制度に関する具体的な情報を概論的，体験的に理解させていき，第三・四時では，選挙制度の背後に存在する価値を吟味するものとなる．この単元計画の中で，熟議の視点からとりわけ重要なのは第三・四時である．

第三時では，単純に各選挙制度のメリット・デメリットを論じるだけでは教科書に記載されているような表層的な議論に留まる．そのため，【表２】に示したような，「調査フレーム」を提示し，そのフレームを埋めるように生徒に調べ学習を促す．これらの学習を通して，学習者は制度が異なる特徴を持っている点を意識すると考えられる．その上で，第四時には，一見，大きく異なるような制度に対し，合意可能な点を模索するような活動がペア学習，グループ学習へと段階的に展開する．それを示したものが，次頁の【表４】の授業展開である．第四時の前半では，前時の学習で調べた内容を比較検討する．それを踏まえて，第四時の後半では，以下の２つの問いを提示し，グループでの議論を行う．

・理想の選挙の在り方を考える上で，全ての選挙制度に共通する価値観は何か．
・理想の選挙の在り方を考える上で，異なる制度の支持者が絶対に合意が出来ない価値とは何か．

これらの議論を通して，全ての選挙制度に共通基盤となりうる「共有できる価値」が存在すること，そして「絶対に合意できない価値」が存在することの二点を明確化する．

これらの学習を通して，学習者は第五時に「自分の考える理想の選挙制度」を発表することとなる．（高橋・斉藤）

【表２】本実践の第三次に提示した調査フレーム

	小選挙区	大選挙区	比例代表
その制度が採用されることで最も利益を得るのはどのような人々か			
その制度を支持する人にとって最も重視するものは何か			
その制度を採用することで犠牲になることは何か			
他の制度を支持する者からの批判として考えられることは何か			

（筆者作成）

【表３】単元計画（全５時間）

時	学習内容	位置づけ
一	**「わが国の選挙制度の概要」** ・わが国の選挙制度について，衆議院議員選挙と参議院議員選挙等に関する国政選挙のしくみについて概論的に説明する． ・現状の知識にもとづいて，「今日のわが国における理想の選挙のあり方」を答えさせる．	概説的な学習による制度理解
二	**「模擬選挙体験を通した選挙制度の分析」** ・小選挙区，大選挙区，比例代表の３つの選挙制度を，教室内での模擬投票を通して疑似体験させることで，決め方によって，結果の差が出ることを実感させる． ・現状の知識にもとづいて，「今日のわが国における理想の選挙のあり方」を答えさせる．	シミュレーションによる体験的な制度理解
三	**「選挙制度を支える様々な思想・価値観の分析①」** ・わが国の選挙制度について，「その制度で得をするのはどんな人か」という発問をスタートとして，制度を単に制度の長短所のバランスをとるだけの仕組みとしてではなく，現代社会における特定の思想を具現化したものであるということを自覚させ，新たな角度から選挙制度を捉えなおさせる． ・その際に，あらかじめ授業者が用意した枠組みに従い，生徒自身が３つの選挙制度の特徴を調べ学習する．	制度の背景となる価値観吟味
四	**「選挙制度を支える様々な思想・価値観の分析②」** ・前時に調査した内容を制度が依拠する思想の視点から多角的に検討することで，制度が思想を具現化したものであるという自覚を一層深める． ・異なる人々が「理想の選挙の在り方」について議論をする際に，各制度が共有可能な共通基盤の創出と合意できない部分を比較検討する．それによって，異なる価値観を持つ人々の合意形成に向けた共通理解をつくりだすことを目指す．	制度の共通基盤・不合意点の吟味
五	**「わが国における理想の選挙のあり方の提案」** ・第四時までに学習した内容を踏まえた上で，テーマ「わが国における理想の選挙制度とはどのようなものだと考えるか」について発表する． ・その際に選挙制度に関する素朴な制度理解を超えた上で，今日の我が国における理想の選挙のあり方について，自らの考えを他者にわかりやすく表現する．	生徒個人による「理想の選挙制度」の総括

（筆者作成）

【表４】第四時「選挙制度を支える様々な思想・価値観の分析②」の主な展開

	学習内容	留意事項
導入	**○前時の復習と本時の指示【一斉】** ・前回使用したワークプリントを振り返った上で，本日はペアで前時に調べた内容を深めることを指示する．	
展開１	**○異なる制度の共通基盤の創出のための考察①【ペアワーク】** ・ワークプリントを利用して，第三時で用いた調査フレームの４項目について，相手の意見を聞いて自身と相手とが一致している点と自身と相手とが一致していない点について確認する． ・その上で各制度（小選挙区・大選挙区・比例代表）について，以下の三点について話し合う． ①三つの制度の間で，合意できる点は何だと思うか？ ②三つの制度の間で，対立している点は何だと思うか？ ③それぞれの制度を進めていくと，どのような社会が形成されていると思うか？	・検討作業を通して，あらたな意見が出た場合は，随時ワークプリントに追記するように指示する．
展開２	**○異なる制度の共通基盤の創出のための考察①【グループワーク】** ※「展開１」でのペアでの話し合いを踏まえ，以下の二つの発問について，グループ（4～6人）で議論をする． 発問１ 「理想の選挙の在り方を考える上で，全ての選挙制度に共通する価値観は何か．」 発問２ 「理想の選挙の在り方を考える上で，絶対に合意が出来ないが重要な価値は何か．」	・発問の順序を共通善の創出→合意できない部分とすることで，生徒に合意できない価値が存在しうることを示唆する．
まとめ	**○共有された内容の整理【個人】** ・これまでの第一～四時の内容を踏まえて，次回は，「理想の選挙の在り方」についてポスターセッションを行うことを伝え，事前に内容を構想していることを指示する．	

（筆者作成）

Ⅲ．実践結果の考察と検証

1．分析の方法と質問項目

先の単元は，実際の高等学校の科目「現代社会」として，生徒数40名程度の３クラス（計116名）で実践された[6]．この実践結果から，本単元の結果の検証を行うこととしたい．

授業実践の検証を行う際には，単元終了後に回収したワークシートの記述分析を行った．ワークシートの質問項目は下記の通りである．

> 問１ 第一時の授業を終える前のあなたが考えた「理想の選挙制度」とは何ですか？
> 問２ 選挙制度ごとのフレーム分析の結果を簡潔に述べなさい．（【本稿の【表２】のフレームに基づく】）
> 問３ グループディスカッションの結果を簡潔にまとめなさい．
> ・理想の選挙制度を考える上で，それぞれの制度を支持する全員が合意できる点は何か．
> ・理想の選挙制度を考える上で，それぞれの制度を支持する人々が絶対に合意できない点は何か．
> 問４ わが国における理想の選挙制度とはどのようなものだと考えるか．問１～問３の結果を踏まえてまとめなさい．

上記のワークシートは，第一時の生徒にとっての「理想の選挙制度」を書かせ，第三・四時での授業結果をまとめさせた後に，最終的に単元全体を振り返った，「理想の選挙制度」を提案させるものとなっている．

2．全体の生徒の結果

では，最終的に生徒は「理想の選挙制度」をどのように捉えていたのだろうか．それに関して，下記の【表５】は生徒の「問４」での意見をまとめたものである．この結果から３点が指摘できる．第一に，特定の選挙制度を選んだ生徒の中では，大選挙区制を選ぶ生徒が多かった点．第二に，制度の改善案を半数弱の生徒が述べている点．第三に，問１と問４で意見を変えている生徒が三分の一程度いた点．これらの点から，授業を受けて自身の意見を変えている生徒が少なくないこと，そして，折衷案的な制度選択をしようとする生徒が多いことが分かる．また，新たな制度の提案をしている生徒が全体の約半数というのは，注目すべき結果である．共通基盤を元に，合意点を模索することが熟議の姿勢であるとすれば，制度の新しい提案をする姿勢は熟議的視点とも言える．

では，これらの認識の形成・変容過程において，熟議的視点は獲得できたのだろうか．これより，生徒の認識変容における①熟議的視点の導入②熟議の視点を基にした提案内容について，考察を行う．

3．考察

1）熟議的視点の導入

先の通り，生徒の中には話し合いによって意見を変容させる生徒がいることが分かった．では，生徒たちは，熟議的な視点をどのように取り入れていたのだろうか．それに関して，生徒が「問４」において熟議的視点をどのように取り入れていたかどうかを種類別にまとめたのが，次頁の【表６】である．この図は，「問４」の記述をした生徒のうち，「全員が合意できる点」「全員が合意できない点」を意識した記述をした生徒がどの程度いたのかをまとめたものである．この考察の際には，本稿の共著者同士がワークシートをそれぞれに分析・評価し，お互いの評価結果を照らし合わせる形でダブルチェックを行った．この表からも分かるように，116名の生徒のうち，45人が「合意できる点」について言及しながら論述をしていた．

また，これらの「合意できる点」について，意見が変わらなかった生徒も言及していた点が挙げられる．同時に課題としては，合意点と不合意点の両方を挙げた生徒数が12人に留まったことが挙げられる．

2）熟議の視点を基にした提案内容

では，このような熟議の視点を意識した学習者の提案はどのようなものであったのだろうか．生徒が異なる制度の合意点や不合意点に言及しながら，新しい政策の改善案を示している例を示す．

【表５】生徒のワークシートの記述結果

	問4での最終的な意見							問1との変化
合計	特定の制度を選んだ生徒			複数の制度の混合を選んだ生徒		新たな制度の提案をした生徒	理想は存在しないと答えた生徒	第一時の意見から変化があった生徒
	小選挙区	比例代表	大選挙区	小選挙区・比例代表並立	三つの制度を併用するべき			
116	11	14	24	9	18	54	13	37

（筆者作成．なお，項目によって重複する回答もある．）

本頁・次頁の【学習者の提案事例１・２】はその例であり，傍線部は，「合意できる点」「合意できない点」に言及した箇所を，波線部は，その代案を示した箇所を強調している．

まず，右記の【学習者の提案事例１】の生徒は，「平等」の視点に立つとすべての制度に善い点と悪い点があると捉える．その上で，少数派の意見を反映するために変数制，その他に投票の義務化を促している．

この意見ではグループワークで「合意できる点」として出された「平等」を重要な観点として提示しながらも，「絶対合意できない点」として明らかになった「少数意見の尊重」の問題についても言及している（傍線部がその箇所に該当する）．その上で，変数制や投票の義務化という独自の意見を提示することで解決案を示すことを目指している（波線部がその箇所に該当する）．この事例は，制度ごとでの共通基盤となる価値と，合意不可能な点を意識しつつ，生徒自身が代案を構想・提案した一例と言える．

次頁の【学習者の提案事例２】の生徒は，３つの制度のメリットとデメリットを比較し，少数派の当選や，選挙の経費超過による経済的コストとのバランスをとる難しさを挙げている．その上で，「有能な者を選びたい」「民意を正当なやり方で示したい」という考え方はすべての制度に共通するものであると指摘し（傍線部に該当する），「平均制」という独自の提案をするに至る（波線部に該当する）．

この提案では「絶対に合意できない点」における経済的コストには目をつぶりながらも，「合意できる点」として明らかになった「公正なやりかたで民意を示す」ことを重視し，大選挙区制の改善案を提示している．

これらの学習者の提案は，制度設計としての未熟さはあるとしても，誰もが合意できる点や合意できない点を意識して制度提案をしている点で，共通基盤を意識しながら，熟議的視点の育成を促した成果として捉えることができる．

【学習者の提案事例１】

【合意できる点（問３）】
・民主主義を基本とする．平等を目指す．

【絶対に合意できない点（問３）】
・完全なる平等　・多数派 or 少数派の尊重

【理想の選挙制度（問４）】
授業前は比例代表がいいと一つに絞ってしまっていたが，比例代表にもどの選挙制度にも善し悪しがあり，「平等」を考えると一概にどれがいいとは選べなかった．なので私は，理想の選挙制度は現代のように複数の選挙制度を合わせたものがいいと考える．しかし，現代の選挙制度と全く同じというわけではなく，二つ変えたい．
一つ目は，多数決の原理を基本として大政党ができ権力が集中してしまうのは仕方ないと思うが，その大政党が少数派の考えを全く聞いていないように思えた．大政党の意見を変えろとまではいかないが，少数派の意見を小耳に挟むだけでも考えが吟味され，さらにいいものができると考える．そこで幅広い意見を聞かせるために参議院を変数制に変えて，すべての政党に無条件に議席を配当するというもの．ただし，その場合はしっかりとした「政党」の定義を定める．二つ目は，やむ無しだが，非自由選挙にするということ．共通の理念で民主主義を基本ということから，やはり少し強制的にでも，国民の意見を聞くべきだと思った．これからの社会をつくる若い人など．なお，罰は軽く，二回続けて投票なしは警告．三回以降は罰金など．(25)

４．実践の効果の総括

以上のように，本単元では，生徒が異なる価値観や主張の合意可能な点と合意不可能な点とを吟味している．その上で，「平均制」という新たな選挙制度を独自に構想・提案している．

この両者の事例では，「変数制」「平均制」という独自のアイデアを構想しているが，その提案の基礎となっているのが，「合意できる点」「絶対に合意できない点」の視点であった．合意可能な，共通基盤としての価値を意識しつつ，絶対に合意できない点を意識して，妥協点を模索していたと言える．

【表６】熟議的視点を意識した生徒の変容者一覧

全生徒	理想の選挙制度を論じる際に，熟議的視点に関わる生徒の数		
	全制度の合意点と不合意点の両方に言及した生徒数	全制度の合意点に言及した生徒数	全制度の不合意点に言及した生徒数
116	12	45	41

（筆者作成）

【学習者の提案事例２】

【合意できる点（問３）】
・有能な者を選びたいという気持ち．公正なやり方で民意を示す．票を多くとって当選したい気持ち．

【絶対に合意できない点（問３）】
・お金の使われ方に差がある．多くお金を使われると経済が混乱してデフレが起こり，経済格差が生まれる．少数派の意見が反映されない．

【理想の選挙制度（問４）】
大選挙区制のメリットとしては少数党などの弱い勢力のものにもチャンスを与えて当選しやすく，多くの民意を聞ける．しかし，デメリットも多数存在し，他の制度と違い多くの金が必要となり，デフレ，恐慌，他国との経済格差が生じる可能性がある．また，いろんな党から人が集まるので，政治が混乱して，効率的な政治ができなくなる．このようにどの制度においてもメリット，デメリットが存在する．しかし，どの制度にも「有能な者を選びたい」「民意を正当なやり方で示したい」などの点においては，どの制度においても共通ではある．では，どのような制度が現代社会に適合するのであるか．図２の①の制度は，平均を図るというものです．（図の掲載は省略：筆者註）選挙に立った人にも人気がある，無いは存在する．しかし，途中で人気があったのに，一気に下がることがある．また，一定の人気を保つ者もいる．その時に定期的に票をはかるものとする．これは全国を15ブロックに分けるなど細かく区切る必要がある．これは時間がかかり多少お金もかかる．しかし，平等な点ではよいのではないかと思う．よって，私はこの平均制が理想の選挙制度だと考える．(99)

先行研究では，選挙制度の背景となる民主主義観を見極め，よりよい制度を選び取る決断ができる能力の育成を重視していた．しかし，価値の異なる制度を個々の生徒が選んでも，そこからの社会的な合意を模索することは期待できない．そのような合意を模索するためには，異なる価値観の人々が共有できる社会的基盤を見定め，合意不可能な点との相違を考慮し，共に理想を追究しようとする認識や態度が必要ではないだろうか．

本単元を受けた生徒は，大選挙区制を選ぶ場合が多く見られた．このことは，結果として折衷的な意見や折り合いをつける意見を述べる生徒が少なくなかったことを意味する.ただ，それらの選択が，合意点や不合意点との間を埋める模索過程としてなされたのであれば，熟議的視点の獲得をする過程として，積極的に評価し得ると考えられる．

5．本実践の課題

一連の評価を通して，本稿における実践の課題として，主に３点が浮き彫りになった．第一に，「合意可能な点」「合意不可能な点」という意味の理解が十分でない生徒が複数名いたことが挙げられる．特に前者に関しては，異なる制度同士でも共有可能な社会的な共通善となる価値を述べるように意図していた．しかし実際には，その回答として「選挙に行くこと」と述べる生徒がいたように，問いの意図が十分に伝わっていなかったことが分かった．第二に，合意点と不合意点の両者に言及した生徒数が，全体の１割程度に留まったことが挙げられる．それに関しては，問３で得た視点をより意識的に活用して，問４を書くように促す必要があると言える．第三に，問３で合意点・不合意点の記載を促す場合に，グループでの意見と個人の意見とを峻別せずに書いた生徒が見られた点が挙げられる．これに関しては，グループの意見と個人の意見が異なる場合もあるため，両者の記述を促しやすい表記に変える必要があると言える．（斉藤・新川）

Ⅳ．結論と課題

１．本提案の意義

本稿における単元開発と実践に関して，その意義を以下のように指摘できる．

１）選び取ることよりも，共通基盤を形成すること

先行研究では，特定の民主主義観に基づいて，選挙制度を分析することを重視していた．加藤(2003) も述べるように，折り合いを重視する日本社会の特色を考慮しても，思想の視点から制度分析を行うことは非常に重要となる．ただ，仮に生徒が特定の民主主義観と制度の関連性に気付き，自分の好みの民主主義観を自覚したとしても，自分の価値観と異なる意見や制度と歩み寄りの姿勢を見せたり，何らかの合意点を見出す力を形成するのは難しい．

そこで本稿では，あえて共通基盤と不合意点の間に溝があることを生徒に意識させ，そこから理想を模索させるような方法を促した．このような実践では，折衷案的な結論が生まれる可能性が高い．しかし，現実の合意形成のプロセスを考えた場合，そういったジレンマの中で，理想を追究し，新しい代案を生み出すような態度の形成こそが重要になってくると考える．

なお，本稿で理想とするのは，共通基盤と不合意点を自覚し，その間を埋めたり，代案を生み出そうとする姿勢や態度であり，「結果としての合意」「目的としての合意」を求めていない．実際，本実践でも，他者との議論によって，合意案を導く場面は想定していない．また，「不合意の合意」という形で，合意できないラインを見極め，たえざる対話を行っていけば良いと思われる．

また，先行研究でもあったように，自分の支持する制度を選ぶ際に，制度のメリット・デメリットを比較して決断をするようなケースが見受けられた．こういったメリット・デメリットの比較分析では，結論自体が個人の好き嫌いで選ばれてしまう可能性がある．そのため，本稿では，あくまでも二者択一ではなく，共通基盤の形成に焦点を当てることに主軸を置いた．

2）熟議型の論争問題学習の実践例の提示

近年，熟議型の論争問題学習が，従来の合意形成論を乗り越えるものとして理論レベルでは論じられるようになってきた（大野，2015：長田，2014）．それに対し本稿では，開発した単元の実践を行った上で，生徒の認識変容の検証を行った．そして，全体の約3割以上の生徒が「誰もが合意できる点」と「合意が困難な点」のいずれかを意識して，意見形成を行うに至ったことを明らかにした．またこの実践の結果，「共通善」という概念を理解させる難しさも浮き彫りとなった．これらの結果は，熟議型の学習に見られる生徒の認識変容を論じる上でも重要な成果だと考える．

3）主権者教育としての新たなアプローチ

18歳選挙権に伴い，選挙への積極参加を促す様々な学習方法が提案されている．ただ，それらの学習では，選挙を体験的に学ぶことで選挙への親近感を持たせるものや，特定の政策分析に絞った詳細な分析を行うものとなりがちである．

一方で，民主主義観自体が表出される選挙制度を比較検討し，社会的な価値の共通基盤を創出しようとすることの意義は大きい．そこで本稿では，選挙制度自体を対象化して熟議をすることで，選挙制度について論じる授業モデルを提案した．この点に関して，本稿での提案は，従来の模擬選挙学習を中心とした主権者教育論とは異なるアプローチを示したものと考える．

2．本提案の課題

本稿の課題として，3点を挙げることができる．

一点目は，選挙という公的な制度枠組みの在り方を重視した結果，選挙以外の参加方法や外国人参政権の問題など，市民の政治参加・社会参加の在り方について捨象してしまった点が存在するということである．実際，熟議型民主主義を考える際に，公的な投票行動以外の多様な方法での意思表明や市民活動の役割は非常に重要になると思われる．

二点目は，異なる選挙制度を分析する際に，制度とその制度の依拠する思想・民主主義観との関係に関して，不明瞭さが残った点である．この点は，本授業が，生徒主体の議論を軸に据えたことで制度ごとの価値の違いを見出させる工夫が不足していたこととも関係していると思われる．

三点目として，「理想の選挙制度」を生徒に考えさせる際に，「問4」に至るまでの評価プロセスをより明確化し，生徒が第一～四時の授業内容をより意識的に，最後の理想の制度提案に結び付けられるように構造化すべき点が挙げられる．

（斉藤・新川・高橋）

【注記】

(1) なお，中（2016）では「ワールドカフェで豊かな対話を―理想の選挙制度を考えよう―」と題して，本稿と似たタイトルの授業開発が見られる．しかし，中の論考の主眼は，ワールドカフェやアクティブラーニング型の授業を選挙制度学習に取り入れる点にある．そのため，理想の選挙制度の合意・葛藤・提案に至る過程に関しては，詳細に理論化・プロセス化はなされていない．また，中の実践では，グループでの合意を形成させる方式をとっている．ゆえに，本稿の授業開発とは異なる趣旨や問題意識の研究と捉えている．

(2) たしかに，池野ら（2004a）が指摘した通り，異なる選挙制度の背後には，異なる民主主義観が存在しており，思想を吟味することによって選挙そのものに対する認識も変容する可能性がある．しかし，選挙制度と民主主義観の対応関係を見るだけでは，何が自分にとって良いのかを自覚化する機会が不十分となる．また，二項対立的な議論を選び取る際にも，いずれかを選ぶことよりも，本来は両者の合意可能な点と合意できない点の関係性を問い直すことが重要であるが，先行研究ではいまだその点が不十分である．

(3) この質問項目は，長田（2014）の研究で示された授業構成原理の知見の一部（「表2『社会

保障制度の葛藤における』のアプローチの構成」（長田，2014，p.88））を参考にして作成した．なお，我が国の選挙制度が同政権下で提案されたものであり，大きな価値観の差が無いという意見もあり得るが，加藤（2003）が述べる通り，小選挙区制と比例代表制では，背景となる価値観や社会像が大きく異なると思われる．

(4) この質問項目は，長田（2014）の研究で示された授業構成原理の知見の一部（「表1　NIEの各冊子に共通する熟議（授業）過程」（長田，2014，p.86））を参考にして作成した．

(5) ここで，同じ問いを繰り返し尋ねる方法論に関しては，パフォーマンス課題に基づく逆向き設計論を参考にしている．（西岡加名恵（2007）「逆向き設計」論にもとづくカリキュラム編成：中学社会における開発事例，教育目標・評価学会紀要，17，pp.17-25.）

(6) 本開発単元は，研究者と高校教員の定期的な勉強会を経て，少しずつ形作られたものであった．当初は，高校教員の実践者の希望に沿いながら，社会的な合意形成能力を育成する授業のあり方を議論することから始めた．それから，徐々に熟議の視点を通し，理想を追究する力を育てるような，選挙制度を考察する授業を構想するに至った．

【引用文献】

- 池野範男・渡部竜也・竹中伸夫（2004a）「国家・社会の形成者を育成する中学校社会科授業の開発：公民単元「選挙制度から民主主義社会の在り方を考える」，社会科教育研究，91，pp.1-11.
- 池野範男・渡部竜也・竹中伸夫（2004b）「認識変容に関する社会科評価研究（1）」『学校教育実践学研究』10号，2004，pp.61-70.
- 岩崎正洋（2013）『選挙と民主主義』吉田書店.
- 大野順子（2015）熟議することに重点を置いた高校公民科での取り組み―選挙マニュフェストを読む授業を通して―，摂南大学教育学研究，11，pp.19-32.
- 加藤秀一郎（2003）『日本の選挙：何を変えれば政治が変わるのか』中公文庫.
- 桑原敏典他（2015）小中高一貫有権者教育プログラム開発の方法（1）―『選挙』をテーマとする小学校社会科の単元の開発を通して―，岡山大学教師教育開発紀要，5，pp.93-100.
- 桑原敏典他（2016）小中高一貫有権者教育プログラム開発の方法（2）―「選挙」をテーマとする中学校社会科・高等学校公民科の単元の開発を通して―，岡山大学大学院教育学研究科研究収録，162，pp.89-97.
- 坂井豊貴（2015）『多数決を疑う―社会的決定理論とは何か―』岩波書店.
- 杉浦真理（2008）『主権者を育てる模擬授業―新しいシティズンシップ教育をめざして』ぎょうせい.
- 田村哲樹（2008）『熟議の理由：民主主義の政治理論』勁草書房.
- 中善則（2016）ワールドカフェで豊かな対話を―理想の選挙制度を考えよう―，社会科教育，No.52. No.680. pp.78-80.
- 長田健一（2014）論争問題学習における授業構成原理の「熟議的展開」：National Issues Forumsの分析を通して―，社会科研究，80，pp.81-92.
- 西村公孝（1991）国民の代表を選ぶ選挙，『政治および国際社会の学習』，研秀社.
- 林大介（2016）『「18歳選挙権」で社会はどう変わるか』集英社.
- 藤原孝章（2010）社会参加学習の事例と課題，唐木清志他著『社会参画と社会科教育の創造』，学文社.
- 溝口和宏（2001）開かれた価値観形成をはかる社会科教育：社会の自己組織化に向けて―単元『私のライフプラン―社会をよりよく生きるために―』の場合―，社会系教科教育学研究，13，pp.29-36.
- 水山光春（2003）「合意形成」の視点を取り入れた社会科意思決定学習，社会科研究，58，pp.11-20.
- 「未来を拓く模擬選挙」編集委員会（2013）『実践シティズンシップ教育　未来を拓く模擬選挙』悠光堂.
- 山田竜作（2010）現代社会における熟議/対話の重要性，田村哲樹編『語る―熟議／対話の政治学（政治の発見 第5巻）』風行社.
- 横尾亮秀（2014）中学社会科における複数の状況を意識した市民的意見の形成の分析―第3学年公民的分野授業「選挙制度を見直そう」の場合―，佐賀大学教育実践研究，32，pp. 255-267.
- 吉村功太郎（2003）社会的合意形成能力の育成をめざす社会科授業，社会科研究，59，pp.41-50.